

現代短歌精講

展望と評釋

早稻田大學講師

谷 馨 著

學燈社刊

早稻田大學講師
拓大圖書館長

谷 馨 著

現代短歌精講

展望と詮釋

學燈社刊行

——現代短歌精講——

昭和二十八年十二月二十日 印刷
昭和二十八年十二月二十五日 発行

著 者 谷 馨

発 行 者 東 京 都 新 宿 区 東 五 軒 町 四 九
保 坂 勝 二

印刷者 東 京 都 豊 島 区 雑 司 谷 一 ノ 三 八
三 木 清

印刷所 東 京 都 豊 島 区 雑 司 谷 一 ノ 三 八
大 盛 印 刷 株 式 会 社

東京都新宿区(牛込局区内)東五軒町四九
発行所 學 燈 社

振替 東京三六二五三
電話 九段(33)八七四五

定価 350円 (地方売価360円)

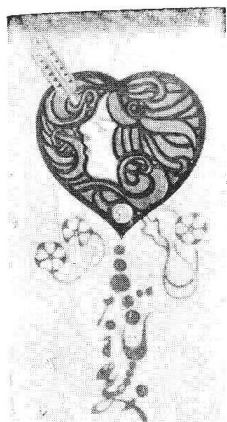
(乱丁・落丁の場合はお取り替え致します)



浅井 忠 筆

正岡子規肖像

—「御祭書屋俳話」より—



「みだれ髪」初版本表紙

巻頭に「この書の体裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり。表紙画みだれ髪の輪廓は恋愛の矢のハートに射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり」とある。(一七七頁参照)

序

歌を作りはじめてから、私はもう三十年に近い。又、和歌史の研究に志してからも、すでに二十年の歳月が流れた。その作品成果の幾つかは、いろいろの雑誌に発表し、歌集にも收め、又研究の稿も本にして出したが、現代短歌作品についての精講を、一冊の本にまとめて世に送るのは、この書がはじめてである。その故か、書き終えて後、長い間胸にためていた思いを、思いきり吐き出したような気がして、胸のはれる感じがした。片々たるものかも知れないが、心をこめて書き、又わが主観にかたよせず、文法を重んじ、特に、鑑賞に努め、わずらわしいほど諸説を参考して、公平な解説を二期したので、一般短歌愛好者にも充分読んで貰えるものにもなり、高校上級生と大学生の参考にもなり得るものを書いたように思えて、ひそかに自信が持てないでもない。しかし、未熟のいたすところ、誤りもあらうと思う。識者は申すまでもなく、ひろく読者の指教を得て、版を重ねる時もあらば、訂正増補して、厚意にこたえたいものである。本書は、学友保坂兄の依頼、それも「熱情をもって……」との依頼によって成った。なお、本書は、若き学友三橋竹藏君の助力をうけた。特に、巻頭の「展望篇」及び太田水穂・窪田空穂以下の諸家の項は同君の助力によるところが多い。しるして謝意を表したい。又私ごときが本書を書くことの出来たのは、先進諸家の業績のおかげである。諸家にあつく御礼申上げねばならぬ。

昭和二十八年十二月、 豊島区雑司ヶ谷の寓居にて

序

谷

馨

一

凡 例

一、本書は、明治・大正・昭和三代にわたる短歌史を展望し、且つその主なる歌人の代表的な作品を精講しようとしたものである。

一、本書は、高校や大学の学生諸君のためを思い、解釈文法の解明に力を注ぎ、又一般短歌愛好者のために、鑑賞を重く取り扱った。即ち、諸説を引用参考して作意を明らかにすること、に努め、作品価値を定め、同時に短歌史との関係を示したつもりである。その点、徹底を期そうとした。（引用文は、仮名づかいなど原文通りとした。）

一、作品は、例外なく原典によった。

一、「展覧篇」は、概観にとどめた。作品の精講を主としたからである。

一、巻末の「索引」をよく活用していただきたい。

現代短歌精講 目次

第一 展望篇

第一章 明治初期歌壇と新題和歌など	三
一、徳川歌壇の殘流	四
二、御歌所派と民間歌人	五
三、開化新題歌と詠史歌	六
(1) 開化新題歌	七
(2) 詠史歌	八
第二章 「新体詩抄」と和歌改良論	九
一、新体詩抄	一〇
二、和歌改良論	一一
三、言文一致歌	一二
第三章 新派和歌の諸運動	一三

一、落合直文と「浅香社」	一三
二、鉄幹と「新詩社」及び晶子	一四
(1) 鉄幹と「新詩社」	一四
(2) 与謝野晶子	一六
三、子規と「根岸短歌会」	一七
四、「竹柏会」と「いかづち会」「若菜会」	一八
第四章 「明星」と「根岸派」	二〇
一、「明星」の浪漫主義とその没落	二三
二、根岸短歌会と「アララギ」の誕生	二四
三、その他	二五
(1) 竹 柏 会	二五
(2) 尾上 榮 舟	二五
(3) 金子 薫 園	二六
(4) 「スバル」創刊	二六
第五章 歌壇における自然主義	二六
一、「スバル」と「創作」	二六

二、牧水と夕暮……………二九

三、柴舟と薰園……………三〇

四、哀果と啄木……………三一

五、白秋と勇……………三二

六、窪田空穂……………三三

七、アララギ歌人……………三四

(1) 伊藤左千夫……………三七

(2) 長塚節……………三七

(3) 斎藤茂吉……………三八

八、その他……………三九

第六章 「アララギ」の隆盛と諸派……………三九

一、アララギ派……………四一

(1) 島木赤彦……………四二

(2) 岡 篔……………四三

(3) 平福百穂……………四三

(4) 斎藤茂吉……………四四

目次

(5)	中村憲吉	四〇
(6)	古泉千櫻	四一
(7)	釈迢空	四二
(8)	石原 純	四三
(9)	その他のアララギ歌人	四七
1	土屋文明	四七
2	土田耕平	四七
3	結城哀草果	四八
4	今井邦子	四八
5	三ヶ島霞子	四八
6	原 阿佐緒	四八
二、諸派歌人		
(1)	北原白秋	四九
(2)	吉井 勇	四九
(3)	窪田空穂とその系統	五〇
1	松村英一	五〇
2	半田良平	五〇

3	植松寿樹	五二
(4)	若山牧水	五一
(5)	前田夕暮	五二
(6)	尾上柴舟とその系統	五二
1	石井直三郎	五三
2	岩谷莫哀	五三
(7)	金子薫園	五三
(8)	吉植庄亮	五四
(9)	太田水穂	五四
1	四賀光子	五五
(10)	佐佐木信綱とその系統	五五
1	石樽千亦	五五
2	木下利玄	五六
3	川田順	五六
(11)	橋田東声	五七
(12)	尾山篤二郎	五七
(13)	土岐善麿	五七

14 口語短歌と無産派短歌

五八

1 矢代東村

五八

2 青山霞村

五九

第七章 戦中戦後の歌壇

六〇

第二 評 釈 篇

一、落合直文

六五

二、佐佐木信綱

六九

三、与謝野鉄幹

九一

四、正岡子規

一五

五、与謝野晶子

一七

六、尾上柴舟

三一

七、金子薫園

三九

八、伊藤左千夫

四四

九、長塚 節

六九

一〇、窪田空穂	二六八
一一、太田水穂	三〇八
一二、北原白秋	三二三
一三、吉井 勇	三三三
一四、若山牧水	三四一
一五、前田夕暮	三五七
一六、石川啄木	三七三
一七、土岐善麿	三九三
一八、島木赤彦	三九九
一九、斎藤茂吉	四一七
二〇、中村憲吉	四四五
二一、古泉千櫨	四六一
二二、石原 純	四七一
二三、釈 迢空	四八三
二四、木下利玄	四九四

目次

10

綜合索引.....五八

第一
展
望
篇

第一章 明治初期歌壇と新題和歌など

明治維新の変革の後のおよそ十五・六年間は近代日本の黎明期ともいふべき時代で、明治改元以来日本の制度文物は海外文化の輸入によって驚くべき変革をとげていった。その全般について細述する余裕はないが、たとえば、二年版籍奉還・京浜間電信開通、四年廃藩置県・新式郵便開始、五年京浜間鉄道敷設・国立銀行設置・太陽曆採用・学制發布、六年徴兵令布告、七年民選議院設立建白、十年博覧会開催、十一年東京府会開設、十二年教育令公布、大阪朝日新聞創刊、十五年日本銀行設立、電燈設置等々、旧来の面目を一新すること極めて急なるものがあつた。「文明開化」の言葉はかかる時期において流行したのである。こうした時流は当然文芸方面にも影響を及ぼすものであり、千年余の伝統を持つ和歌の世界もまたその例外ではなかつたのである。しかし、制度や施設の変革は一朝にして成つても、人間の精神を基盤とする文芸の変革は決して短時日を以て実現するものではなかつた。短歌が真に近代文芸としての存在を主張し得るまでには、実に維新後三十年を必要としたのである。

明治初年における歌壇の実態は、おおむね幕末歌壇の延長であり、いわゆる旧派が歌壇の实権を握り、その詠風は依然として旧態を出なかつた。この間僅かに「新題和歌」と称する、題材として文明開化の事物を採り入れたもの、又東西史上の著名な人物を詠みこんだ「詠史歌」などが行われ初めたに過ぎない。歌論・歌話も漸く盛んに